

新しい時代を創造する「未来の守護者」

～ 探究的な学習を通して、「創造力・表現力に富み
正解のない課題に納得解を導く児童」を育成～

昭島市立富士見丘小学校



1 学校の概要

昭島市は、昭和 29 年 5 月 1 日、昭和町と拝島村が合併し、東京都で 7 番目の市として誕生した。都心より約 35 キロメートル、東京都のほぼ中央に位置し、市南部には多摩川が、市北部に玉川上水が流れている。武蔵野の豊かな自然が残り、用水や湧水も豊富で、地下 70 メートルより深い層を流れる深層地下水 100% のおいしい水道水は、市民の誇りである。

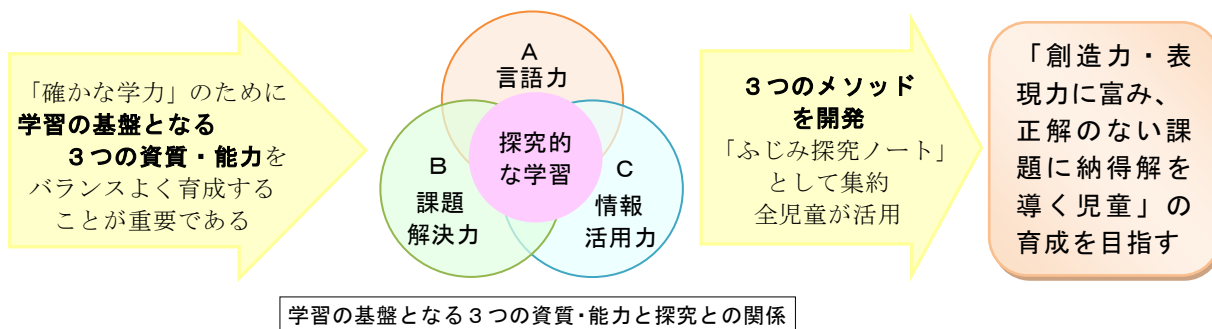
創立 75 周年を迎えた本校は、落ち着いた住環境の中にあり、自閉症・情緒障害特別支援学級、難聴・言語障害通級指導学級を併設している。全ての児童、職員、保護者、地域の方々が協働する仕組みのある学校として、誰もが安心して過ごしやすい社会を創る芽を育てている。

学級数：19 学級（内、特別支援学級 6 学級） 児童数：403 人（内、特別支援学級 41 人）

2 教育活動実践の内容

(1) 概要

受賞の対象となった「探究的な学習」は、学力向上の中核を担っており、その基盤としての言語力、情報活用力、課題解決力をバランスよく育成することを重視してきた。正解のない課題に向き合い、様々な人や社会と協働しながら納得解を導く児童の育成を目指す取り組みは、他校にも大きな影響を与えながら、地域の方々から「地域の誇り」と言われるまでに定着してきた。市内での認知度は高く、その功績を高く評価していただいたものと受け止めている。



(2) 経緯

令和 2 年度 ふじみ・GIGA スクール・スマート・ツール（F・G・S・t）構想、ロードマップ開発
校内「短作文チャレンジノート」制作

令和 3 年度 令和 3・4 年度 昭島市教育委員会 研究指定校
校内「短作文」毎週 1 回、「思索チャレンジコンテスト」年 1 回開催（以降毎年）
富士見丘小学校「教育の情報化ガイドブック（全 150 ページ）」制作、活用開始

令和 4 年度 令和 3・4 年度 昭島市教育委員会 研究指定校 研究発表会
言語メソッド、情報メソッド、課題解決メソッドを開発
富士見丘小学校「ふじみ探究ノート（全 72 ページ）」を制作、活用開始

令和 5 年度 第 49 回 パナソニック教育財団 実践研究助成 助成校指定・成果報告
全国「図書館を使った調べる学習コンクール」佳作 3 点、奨励賞 1 点の入賞

(3) 教育活動実践の柱1「思索チャレンジコンテスト」

第一の柱は、学校図書館活用を中心として、学びの基盤である言語力を育成することである。学校図書館が育てる力は「生きる力」に資するものであり、生涯にわたる学習の基盤形成につながるができる。そのため、本校では、保護者・地域の皆様の御支援・御協力を得ながら、各教科等における学びを支え、課題解決学習や探究学習の拠点として、主体的・対話的で、深い学びを推進する「知の宝庫」として活用している。

とりわけ書くことに力を入れ、全学級で週1回、15分間の『作文チャレンジ』に取り組んでいる。毎回異なるテーマや条件を設定し、論理的思考としての言語、感性情緒の基盤としての言語、伝え合いの道具としての言語、それらの力を「書くこと」で育成する学習である。

その集大成が、毎年実施している『思索コンテスト』(図1)である。全児童が、御家庭でも話し合いながら、テーマに向き合い、思索し、自分の考えを自分の言葉で表現している。独創性、論理的な一貫性、説得力等の観点から校長賞を表彰し、さらなる意欲につなげている。



図1 思索コンテスト

(4) 教育活動実践の柱2「教育の情報化ガイドブック」

第二の柱は、学習指導要領において、学習の基盤となる資質・能力として新たに位置付けられた情報活用力を育成することである。社会の在り方そのものが、現在とは非連続的と言えるほど劇的に変わる「新たな社会 Society5.0」の到来を見据えた資質・能力である。

本校では、『F・G・S・t 構想』を策定し、必要な ICT 環境を整え、教科等の指導における効果的な ICT 活用を図るとともに、カリキュラムマネジメントにより系統的な学習を充実させている。F・G・S・t とは、ふじみ GIGA スクール・スマート・ツールの略であり、ICT を、教員は“賢い教具”として指導に活用し、子供たちは“賢い文房具”として学習に役立てるという、目的と手段を明確にしたものである。

また、教育の情報化の全体像をロードマップとしてグランドデザインを策定した(図2)。そして、『教育の情報化ガイドブック』として、教育の情報化の考え方とともに、6年間の指導計画や実践事例まで、すべてを一冊にまとめた冊子を作成し、校内の共通実践に役立てている。



図2 F・G・S・t ロードマップ

(5) 教育活動実践の柱3「ふじみ探究ノート」

第三の柱は、課題解決力、探究する力を育成することである。

探究学習は、課題設定から表現するまでのサイクルを発展的に繰り返すことで、正解のない問いに向き合い、自己の在り方、生き方を考え、自らの可能性に気付く学びである。本校が独自に作成したワークノート『ふじみ探究ノート』(図3)を活用し、はてな(?)の問い作り、課題解決の様々な思考ツール、地域人材との関わり方まで、子供たち自身が系統的に探究学習を進めることができるように授業を展開している。



図3 探究ノート

(6) 教育活動実践の柱4「図書館を使った調べる学習コンクール」

探究学習の糸口あるいは集大成につながるものとして、全児童が調べる学習に取り組んでいる。図書館を使った調べる学習は、知的好奇心、情報リテラシー、読解力、思考力、言語力等が磨かれる学びである。

その手立てとして、探究的な学習のプロセス(図4)を踏まえて、①5月、一人一人のテーマ(問い)及び探究計画の作成に各学級で向き合う、②6月、市民図書館がテーマに沿った本を選書、③7月、校長が各学級で探究についての授業、④8月、担任と専門家による個別相談会、⑤9月、提出された作品の展覧会を実施、⑥10月、校内選考を表彰など、学校全体で取り組んでいる。

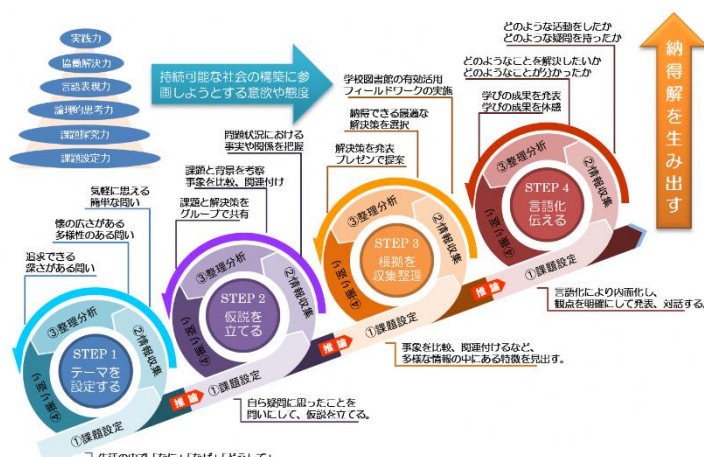


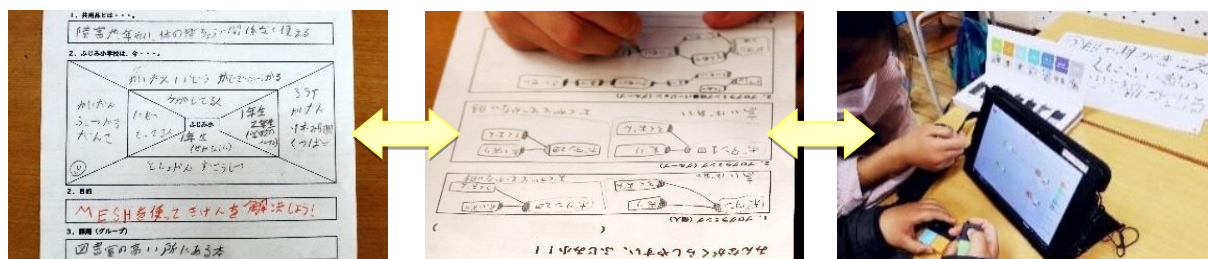
図4 探究的な学習のプロセス

(7) 教育活動実践の柱5「パナソニック教育財団 実践研究助成」

令和5年度には、これまでの実践がパナソニック教育財団に認められ、助成校に指定された。ソニーの MESH ブロックを活用したプログラミングを用いた授業実践を重ね、その有効性を検証するとともに、言語力、課題解決力の醸成と相互効果があることも明らかにした。

本校の児童は、相手意識が弱い面があり、探究的な学習のその先に、他者や社会があることを意識できるような授業展開を工夫し、未来の社会を担う子供たちが論理的に思考し、プログラミングを活用して新たな価値を創造する力の育成に努めた。

各学年の発達段階に応じて効果的な活用方法を模索しながら「MESH を活用したプログラミングを、探究的な学習のプロセスの中に組み込んだことにより探究の在りようが深まった」(教員の感想)など、手応えを実感する教員が多い。教育の目的と手段を明確にして、多様な授業改善の重要性に意識が高まっている。



3 まとめと今後の展望

人類の未来を創造し、未来を守るのは、今の子供たちである。本校では、子供たちを「未来の守護者」として捉え、新しい時代を創造する力を育成することを第一義として、多面的・多角的に方策を練り上げながら、日々の教育活動を展開している。しかし、これからの学校は、教職員の力だけで動いていくことは困難である。保護者や地域、関係機関等の力をお借りすることによって、よりよい教育が実現できる。今後も保護者・地域と緊密に連携・協力し、保護者・地域に信頼され、尊敬される学校づくりに努めていきたい。